慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大阪慶應義塾が福沢諭吉と金玉均を結びつけたのか
Sub Title	Fukuzawa and Osaka was it Osaka Keiogijuku that brought GIM Okgyun and Fukuzawa Yukichi together?
Author	猪木, 武徳(Inoki, Takenori)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2010
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.27, (2010.) ,p.1- 26
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集 福沢諭吉生誕百七十五年 福沢と大阪
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20100000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十七巻（二〇一〇年）
小特集：福沢諭吉生誕百七十五年　福沢と大阪

大阪慶應義塾が福沢諭吉と金玉均を結びつけたのか

猪木武徳

一　はじめに

二〇〇八年春、慶應義塾は創立一五〇年を機に「慶應大阪リバーサイドキャンパス」を大阪大学付属病院跡地に開設した。この慶應義塾の大阪進出は人々に意外の感を与えたかもしれない。しかし振り返って考えると、もともと大阪と慶應義塾の創設者福沢諭吉の縁はきわめて深い。まずなによりも、諭吉は父が勤務する大坂の中津藩蔵屋敷で生まれている。福沢諭吉誕生地記念碑が、（いまは吹田に移転した）大阪大学医学部付属病院内（大阪堂島浜通りの中津藩蔵屋敷の勤番長屋）にあったことは、大阪大学に二八年勤務した筆者も知っている。福沢は、父の死によって一旦大分県の中津に戻るが、二〇歳のときに大阪の緒方洪庵の「適塾」に入門して蘭学を学び、西洋思想と新技術の根本に触れた。知的吸収力の最も大きい青春時代の三年余を大阪で過ごし

たのであるから、福沢のような知性と感性の鋭い人間が、大阪の風土や人々の生活観の影響を受けなかったはずはない。

したがって、二〇〇八年春の慶應大阪新キャンパス開設には、単に、有名大学の地方展開以上の歴史的な由縁があった。そもそも慶應義塾が、蘭学・医学の伝統ある大阪の地に創設されていてもおかしくはなかった。梅渓昇『緒方洪庵と適塾』が、適塾の歴史を「大阪における蘭学の伝統」から説き起こしているように、慶應義塾が大阪で創設された可能性は十分ありえた。(1) もちろん、福沢のオランダ語から英語への「転換」が象徴的に示すように、その後日本が英国の覇権下にあった世界経済に組み込まれ、最初に日本を開国させた米国との交際を密にし、政治と経済が東京中心に展開したことからして、もしも大阪から慶應義塾が出発していたならば現在のような慶應の発展は見られなかったともいえよう。

ただ大阪は、一般に言われる以上に後の福沢の思想と行動に影響を与えた土地だと筆者は感じる。いまから一〇年前の二〇〇一年八月末、阪急百貨店大阪うめだ本店で開かれた「世紀をつらぬく福沢諭吉―没後一〇〇年記念―大阪展」を観る機会があった。そこで一八七三年（明治六年）に設置された「大阪慶應義塾」に関する資料に出会った。出品されていたのは、「慶應義塾分校設立願写（大阪慶應義塾）」「大阪慶應義塾開業報告・入社の法」「大阪慶應義塾記録」などである。慶應義塾の歴史に通じた人にとっては、このエピソードにことさら新味はなかったかもしれない。しかしその後、福沢諭吉と朝鮮の「開化派」との関係を調べた折、福沢が金玉均と出会ったこと、その出会いを取り持った石亀福寿なる人物がこの大阪慶應義塾で学んだことを知るにつけ、大阪は、福沢のアジア、特に朝鮮との縁を深めた土地でもあったと思うようになった。この小論では、その推測について、筆者が調べたことを報告したい。

本稿では次のように話を進める。まず大阪慶應義塾の開設と閉校の事情と、大阪慶應義塾へ入社した石亀福寿の履歴および事績を振り返る。次いで石亀が金玉均を福沢に紹介した経緯、朝鮮の「開化派」金玉均の政治的な役割、金玉均と福沢の交際について見る。また、石亀福寿と福沢の交友を、「檀家」としての関係、仏教思想の教導者、仏教保険事業の推進者という側面から触れ、石亀と福沢の大阪慶應義塾を縁とする関係の深さを示すことにしたい。

二　大阪慶應義塾と石亀（寺田）福寿

東京の慶應義塾が教育界で確固たる地位を得始めた明治六年ごろから慶應義塾の地方展開が始まった。[2] そのなかで最初の分校、大阪慶應義塾は明治六年一一月に開かれた。[3]「関西地方学生にして東京に上ることの難き者をして就学の便を得せしめんが為に」、[4] 荘田平五郎（臼杵藩出身の士族）と名児耶六都（新潟県士族）を大阪に派遣して開校されたのである。[5] 明治六年一〇月八日の東京府知事・大久保一翁と大阪府権知事・渡辺昇に宛てた福沢、荘田、名児からの分校設立願にも、「関西の生徒は遠路の往来不便に付」という設立理由が書き込まれている。京都に分校が設置されたのも（明治七年二月）同じ流れの中の事業であった。

だが大阪慶應義塾はわずか二年足らずで閉校、徳島移転を余儀なくされる。その理由として、時の校長矢野文雄が「東京・大阪の交通稍便なるに従い、（中略）追々本塾に入るもの多く」と述べていることからも、この閉校は「交通発達」のため、という単純明快な理由によるものとされている。[6] 慶應義塾が東京にあるため関西の学生が不便をしているので開設したが、交通の発達でその不便さも少なくなってきたので、大阪は閉校に

して、いまだ不便な徳島に移転しよう、というのである。

しかしそれ以外に大阪の環境条件や義塾の経営事情も無視できない。『福沢諭吉書簡集』（第一巻）の補注は次のような原因も指摘している。即ち、大阪では、「商売には学問は不要」という風土があったこと、大阪に長期滞在して学校経営に専念する人物が見つからなかったこと、教員の顔ぶれが頻繁に変わったこと、などである。(7)

かくて矢野の伝記『竜渓矢野文雄君伝』にあるように、徳島の有力者の希望と援助があったため、大阪の生徒を引き連れて同地へ移動したのである。(8) しかし徳島固有の塾生は一〇名に満たなかったとされ、徳島慶應義塾は明治九年一一月まで存続したにすぎない。(9)

大阪分校では、英（原）書科・訳書科を設け、洋算・和算も主要教科目として教えていた。(10) その大阪慶應義塾には二年弱の間に、英書科の学生七五名、訳書科一一名、計八六名の学生が入門している。(11) 具体的な人名は、『慶應義塾入社帳』第五巻の「大阪・徳島慶應義塾入社帳（三冊）」で確かめることができる。この中に、本稿で以下に取り上げる石亀福寿なる人物の名前が六六番目に現れる。この石亀が、福沢諭吉と金玉均の間を仲介した人物であることは、すでに諸処で指摘されている通りである。例えば福沢の伝記、富田正文『考証 福沢諭吉』も、福沢の「脱亜論」と金玉均を論じた箇所で、寺田（石亀）福寿が大阪慶應義塾に学んだ縁で諭吉の知遇を得た学僧として触れられている。(12)

ただ、この大阪慶應義塾の「入社帳」がどの程度正確なものなのかという問題は残る。「入社帳」には、本人の姓名、出身府県、身分、宿所、父・兄弟姓名、年齢、入社年月日、入社証人姓名が記されているが、十数名のものについては、姓名以外のデータの全て、あるいは一部が欠落している。石亀福寿の場合は、その姓名

が記入されているだけである。それゆえかつては、石亀は慶應義塾に入社したことはないとの説もあった。その根拠としては、福沢と同じ中津出身の浜野定四郎（当時塾長）に宛てた福沢の手紙（一八七九年ないし一八八〇年の七月八日と推定される）が挙げられていた。[13]

拝啓。此人ハ石亀福寿ト申、東本願寺之生徒ニして、本塾へ入社ハ不致候得共、嘗而矢野、後藤ニ従学いたし候事も有之。好而英書を読ミ、就中フヒソロフヒーニ執心。此度出京、尚活計之傍ニ読書勉強いたし候とて色々話もあり。何卒一度御目ニ掛り度由申聞候ニ付、添書認メ附与いたし候。是ト申ス用事も無之候得共、今後学問上之義ニ付、何か御高論も拝聴仕度ト、熱心罷在候義、宜敷様御待遇奉願候。用事而已申上度、早々頓首。

七月八日　　福沢諭吉

浜野定四郎様　梧下

「本塾へ入社ハ不致候得共」という箇所が問題になるのである。しかし大阪慶應義塾の「入社帳」の記入に誤りがなければ、慶應義塾塾史資料室長であった会田倉吉が推定するように、石亀福寿は、（東京ではなく）大阪慶應義塾に入社し、その入社の時期は「入社帳」への記載順序からすると、明治八年の三月か四月ということになる。[14] 会田はこの書簡に現れる矢野は矢野文雄であるとの推測を支持し、「矢野文雄は石亀の入学した明治八年当時、この大阪の分校校長をしていたのであった」としている。

以上の流れを要約すると次のようになろう。石亀は、明治八年の春に大阪慶應義塾に入社した。しかし大阪

慶應義塾はその三、四ヵ月後の一八七五年（明治八年）七月に徳島に移転している。徳島慶應義塾は翌九年一一月までしか続かなかった。石亀が、この徳島への移転と閉鎖のなかで、どのように動いたのかは正確にはわからない。後に述べるように徳島へ石亀も移ったという記述もあるが、徳島慶應義塾の『入社帳』に彼の名前は現れない。(15)

その石亀を、一八七九年（明治一二）あるいは一八八〇年夏に、先に示したように福沢は東京の慶應義塾の塾長であった浜野に紹介する手紙を書いている。ということは、その三年足らずの間に、福沢が石亀を十分知ることができるほどの付き合いがあったことになる。後に述べるように一八八〇年代以降、本願寺の僧侶としての石亀が、福沢に仏教の教説に関する知識を伝え、福沢家の仏事の世話をしていたことをうかがわせる手紙が少なからずある点も見逃せない。しかし、福沢と石亀が「縁を結ぶ」そもそものきっかけが、「大阪慶應義塾」であったことは、（証明は難しいが）一応認めてもよかろう。この石亀福寿の宗教活動と生命保険会社設立活動における福沢との関係については第四節で触れる。

いずれにせよ、石亀との縁で、福沢は朝鮮独立の急進派であった金玉均に出会う。そしてこの金玉均こそは、後の福沢から朝鮮問題への深い関与を引き出した人物であった。次にその金玉均について、福沢との出会いと交友を中心に見ておこう。

三　福沢に金玉均を紹介する

金玉均（一八五一―九四、号は古筠もしくは古愚、日本名・岩田周作）は、清国との事大（宗属）関係に固

執する閔氏一族を中心とする守旧派に対抗して、清国からの独立と日本の明治維新をモデルにした国内諸制度の近代化を目指す朝鮮開化派のリーダー的な存在であった。[16] 開化派の政治集団の中でも、後に触れる甲午改革（一八九四―九五）を主導した穏健的な開化派とは異なり、金は奪権闘争によって「君権変法」を目指す急進派の指導者であった。両派とも、政治・経済面と社会的な旧制度を残したまま開国した（一八七六年の日朝修好条規）朝鮮にとって、国内の近代化が焦眉の急であるとの認識は共通していた。日本への開国に遅れること六年、一八八二年には、米国、英国、ドイツなど欧米諸国とも朝鮮は同様の条約を結び世界経済の中に組み込まれて行く。福沢は、この日本による最初の朝鮮開国を、米国が日本を最初に開国させた事実とパラレルに把え、「左れば我日本国が朝鮮国に対するの関係は、亜米利加国が日本国に対するものと一様の関係なりとして視る可きものなり」と述べている。[17]

日本をアジアにおける「近代化」の魁と見ていた朝鮮政府は、一八七六年四月第一次日本修信使（金綺秀）を派遣し、日本の状況を視察させ日本の開国経験談を聴き取らせた。金玉均は、初期開化派の一翼を担った腹心の仏僧・李東仁（？～一八八一）を一八七八年六月にひそかに日本に派遣する。[18] 東本願寺釜山別院奥村円心の紹介で京都の東本願寺を訪れた李は、そのあと一八八〇年三月、東京の東本願寺別院に移り僧侶寺田（石亀）福寿を紹介され、その寺田福寿のつてによって彼は福沢と連絡をつけることに成功したのである。[19] 大阪慶應義塾で学んだ経験のある寺田は、その縁で李を福沢に引き合わせ、その後しばらく李は福沢邸を拠点に日本の事情を視察し、一八八〇年九月、朝鮮に帰国後その見聞を金玉均に報告した。

金の第一次日本訪問

一八八一年、朴定陽、洪英植、魚允中ら一二名の朝士および随員をふくめた計六二名の「紳士遊覧団」の日

本見学の報告に接し、金自身も一八八二年三月、国王の命を得て日本視察の機会を得た。[20] 長崎から、神戸、大阪へ入り、途中京都まで遠路迎えに来た寺田福寿とともに、同年六月、東京へ赴き、東京で日本の政治、経済、軍事等の施設を視察した。このとき金は三田の福沢邸を訪れている。これが福沢と金玉均の初対面となる。ちなみに、この年の三月一一日の『時事新報』の社説に「朝鮮の交際を論ず」と題する最初の朝鮮論が掲載されている。福沢の朝鮮問題への関心が急速に高まりつつあった時期である。金の人品と見識について聞き及んでいた福沢は、実際に面談するなかでますますその人物に好感をもち、自身の別宅内に起居させ、政府の高官や民間の有力者たちに彼を引き合わせることになる。[21]

（一）壬午事変（一八八二年）

福沢との接触などを通して日本を友邦と感じとった金玉均は、さらに大規模な視察団を編成して再度来日しようと決心、一八八二年八月、一旦朝鮮に戻るために神戸を経て下関まで来ると、そこで漢城（ソウル）で大規模な兵士の乱が七月二四日に起こり政権を担当していた閔氏一族の政府高官、日本人の軍事顧問、日本公使館員らが襲撃されたとの報に接する（壬午事変）。守旧排外の前政権担当者大院君が再び実権を握ったのである。開明の思想を伝えるため生命の危険を覚悟して金は帰国したが、乱の首謀者大院君はすでに清軍によって天津に連れ去られ軟禁されており、漢城の町は清国の軍隊で占領されていた。この状況を国辱と感じた金は、清国政府を敵と思い定め、青年官吏たちに日本視察の状況を語って聞かせ、祖国独立を目指す機運の醸成に専念するようになる。

金の第二次日本訪問

この壬午事変の結果、済物浦条約の条件として償金五〇万円、公使館保護のための駐兵権、被害家族への補償のほか、日本に「謝罪史」を送ることとなり、一八八二年（明治一五年）九月、金もこの案内役として同道するところとなった。翌八三年一月、金は再び福沢を訪ね、さらに井上馨外務卿も訪問、その斡旋によって横浜正金銀行から一七万円の借款を得ることに成功し、この借入金から五万円を日本への償金の一部（第一回分）として支払った。ちなみに、この一行が三月に帰国して間もなく、朝鮮からの留学生三〇余名が福沢を頼って東京に来た。福沢は彼らを慶應義塾の他にも、陸軍戸山学校や逓信省の電信講習所などそれぞれの志望に応じて振り分け受け入れさせた。[22]

また、金は滞在中、朝鮮政府の諸政改革の顧問となるべき人物の紹介を福沢に依頼、福沢はこれに「多年慶應義塾に在りて蛍雪の辛苦を嘗め、社会の人事に当たりて、実に文明の事を知る人」、塾出身の『時事新報』記者、牛場卓蔵を推薦している。[23] 一八八二年（明治一五年）一二月、牛場が朝鮮政府の招きで、全権大臣朴泳孝の一行と共に朝鮮に渡る際、随員として井上角五郎（一八六〇―一九三八）らを同伴した。井上は福沢の紹介で後藤象二郎の秘書となっていた人物である。しかし漢城で牛場らを待っていたのは満朝閔氏一族による諸政の壟断であり、金玉均ら改革派が手を打つすべのない政情であった。開国後の日朝関係には進展の兆しは全く見られなかったのである。こうした状況を受け、牛場らは帰国を決意したが、井上角五郎は一人漢城に残り、政情民情を探りこれを福沢に通信する決心をする。

開化派の要請にこたえて、井上角五郎は朝鮮で最初の官報と新聞双方の機能を持つ『漢城旬報』の創刊に協力させている。[24] 一八八三年七月一日付けの井上角五郎宛の次の手紙は、朝鮮滞在中の心構えを伝えている。[25]

（前略）其地ニ居て、朝鮮人之信を取ル可きハ無論之事なれ共、元ト是レ日本人なり。其政治上之方向も、固ゟ政府と同しからざるを得ず。殊ニ外国ニ居㊟ハ、同国人即チ骨肉ニ異ならず。竹添氏へハ別㊟世話ニも相成義、折々御尋問、親しく御交際被成度事ニ存候。（後略）

先にふれたように、横浜正金銀行から一七万円の借款を得ることに成功した金玉均は、外務卿井上馨から朝鮮政府の正式な委任状があれば三〇〇万円の借款も可能との臆測を聞かされていたために、帰国後朝野に日本からの借款を説いて回った。三〇〇万円は、当時の朝鮮の全歳入に匹敵する額である。[26] しかし、借款成功が金の手柄となることを恐れた閔氏一族は八方手を尽くしこれを妨害、結局金は僅かに国王から密勅の委任状を獲得することしかできなかった。

金の第三次日本訪問

一八八三年六月、再び金は国王の国債（三〇〇万円借款）委任状を携えて来日する。しかし外務卿井上馨は前言を翻し、借款の斡旋に全く動こうとしなかった。金は福沢の助けも借り四方に手を尽くしたが良策が見出せず、仏清間の不協和音に乗じてフランス公使に相談したところ、フランス公使は借款とともに朝鮮独立党の運動を援けるべくフランス艦隊の派遣まで申し出てきた。[27] これに応じて後藤象二郎は自由党の壮士で民兵を結成し朝鮮へ送り込むという計画を企てる。これを知った伊藤博文は、日本人民兵を結成するなどは国家の一大事とみなし、この借款を含むすべての計画を取り消させた。結局、金はこの第三次訪日で何の成果もあげることができず、残された戦略としては閔族を打倒して独立の新政体を樹立する外はないと固く決意し、一八八四年（明治一七）四月、日本を去っている。

以上のように、結局、金玉均は一八八一年から八四年の間に三度来日し、福沢だけではなく、井上馨、後藤象二郎など政界要人と接触し、朝鮮開化派のために協力を求め、また総計五〇余名の留学生を福沢の許に送って慶應義塾や陸軍戸山学校等に入学させたが、借款問題では成果を上げることはできなかったのである。

（二）甲申事変（一八八四年一二月）

一八八四年八月、安南事件をきっかけにフランスと清の関係が悪化してきたことを受けて、日本の外務省は朝鮮独立党の運動を支援する動きを見せ始めた。同じころ、金玉均を中心とする独立党も王の身辺で次第に勢力を盛り返しつつあった。そんな折、朝鮮政府が新たに設置する郵政局開局式の宴が開かれる機会があった。金らは要人が一同に会するこの宴を好機として閔氏政権に対するクーデタを敢行、一八八四年（明治一七）一二月四日、閔泳翊をはじめとして事大党の政府要人ら七名を殺害した。

この叛乱を清軍の企てと聞かされた国王は、日本大使館に王宮守備を要請、日本公使竹添進一郎はこれに応えて日本兵二〇〇名を率いて王の護衛に参じた。翌一二月五日、政府要人は更迭され、独立党による新政府が樹立されたが、やがて給与支払いに不満をもつ朝鮮兵士が新政府から離脱、袁世凱の手引きもあり清軍に合流する。日本に協力を求めながら、金玉均、洪英植、朴泳孝らは、士官学生や壮士を指揮して国王高宗と王妃の閔妃を隔離しようとしたが、袁世凱率いる一五〇〇名の清国軍は翌六日午後に王宮を急襲、これを守る朝鮮兵士のみならず、日本軍兵士とも交戦した。数で劣る日本軍はやがて撤退を決意、その夜、竹添公使とともに一旦日本公使館に退き、翌日には居留民らとともに仁川まで落ちのびた。この時、竹添の反対を受けつつも、再び朝鮮に渡っていた井上角五郎などの計らいにより金玉均は仁川より日本へ渡る千歳丸に同船、神戸・横浜を

経て、一二月末、東京三田の福沢邸に匿われる。[28]

一八八五年一月、外務卿井上馨は甲申事変の処理のために漢城に赴き、新政府との間に漢城条約を締結した。この条約は朝鮮政府の謝罪や日本への賠償などが含まれたものの、朝鮮に対し寛大に過ぎるとの見方が広がった。また伊藤博文が全権大使として、もうひとつの当事国である清との間に締結した天津条約はさらに微温的なものであったために国民の失望を誘う。しかし、言論統制が厳しい当時はこれを正面から批判することは困難であった。

福沢も直接これに言及することはなかったが、仏と清の和議が成立した際に、『時事新報』に「仏清新天津条約」と題する論評を書き、前年の天津仮条約と比較してフランスの清に対する姿勢が大幅に後退したことを指摘、これに「仏国人民が（中略）必ずや文明国民の固有する言論の自由と出版の自由とを十分に実用して」「其新内閣の政略の卑怯なるを憤り、飽くまで政府を攻撃して止むことをしらざるならん」と書いたのは、間接的ながら伊藤の天津条約を批判したものと考えられる。[29]

甲申事変は、開明的な少数のエリートが日本軍の出動を求めて国王を護衛したため、大衆の反日感情をむしろ強めたという側面があった。福沢は金玉均自身に関しては「信用の置ける」唯一の「朝鮮人」（石河幹明『福沢諭吉伝』第三巻）として金を援護し、甲申事変後の処遇に関してしばしば『時事新報』に取り上げ、日本、清国、韓国の政府を批判している。[30] 福沢は政治問題について、「余は作者で、筋書を作るのみ」というのが持論であった。しかし、甲申事変は例外で、福沢は「自から進んで役者を選み役者を教へ又道具立其他万端を指図」（石河『福沢諭吉伝』第三巻）したと言われる。

ちなみに近年、福沢から当時参事院議官兼駐伊特命全権大使であった田中不二麿へ宛てた書簡（明治一八年

四月二八日付）が発見された。[31] この書簡では、甲申事変を竹添公使は事前に知っていたが、一、二の人の抜け駆けで失敗したこと、昔の日韓、日清の状態に戻すことは難しいこと、余計なことを仕出かしたものだとの慨嘆、福沢が教唆したという言い掛かりは馬鹿げているなどの感想、そして甲申事変の日本人刺客の係りに関する記述が注目されている。

（三）日本亡命から暗殺へ

守旧派政権（事大党）に対して開化派（清からの独立を主張する独立党）が起こして失敗した甲申事変のあと、金玉均は日本に亡命する。亡命直後は、三田の福沢家にいたが、一八八五年三月、金玉均一行は、浅草本願寺に滞在した後、横浜居留地の洋館へと移った。ちなみに、浅草本願寺にかくまわれる前に、寺田福寿のいた本郷真浄寺に一時寄寓していたという証言を琴乗洞氏は得ている。[32] 福沢が「脱亜論」を『時事新報』（明治一八年三月一五日）に掲載したのは、まさに金が福沢邸から真浄寺、浅草本願寺へと居処を移していたときであった。甲申事変による金たちの「三日天下」が終わり、金が日本へほうほうの体でたどり着いた直後である。福沢が朝鮮と中国に関して、「我輩を以てこの二国を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、迚もその独立を維持するの道ある可らず」と嘆じたのも故無きことではない。[33]

その後、金の日本への亡命を日本と清との外交関係の障害と見た日本政府は、一八八六年六月、内務大臣山県有朋による「一五日以内の国外退去」命令によって、金玉均を小笠原諸島父島に幽閉する。ついで母島へ移され、そこで健康を害した金は、一八八八年七月横浜に戻り、八月にはさらに北海道（札幌、小樽）へと移送された。しかし一八八九年九月、金は病気療養のため東京へ向かうことが許される。

翌月の一〇月一八日、福沢は藤野近昌（特選塾員、北海道炭鉱鉄道会社役員）への手紙の中で、岩田氏（金玉均の日本姓）への世話を

岩田氏の義、詳に被仰下、同人は兼て老生の所知なり。私に相願には無之候得共、出来候義は御添心被成遣度奉願候。

と、依頼している。[34]

小笠原諸島、札幌へと場所を移しながら幽閉されていた金玉均は、ようやく一八九〇年四月になって日本国内では自由の身となる。その後、金玉均は東アジア三国の「三和主義」を唱え、一八九四年（明治二七年）三月、その理解を広めるため上海へ向かい、上陸して投宿したところを暗殺される。その後、金玉均の遺体は上海から朝鮮に搬送され、非業の「凌遅斬の刑」に処された。金の供養のための戒名を福沢は寺田福寿に依頼し、法要も福沢邸で執り行っている。[35] 福沢は遺族を探し当て、これを日本に引き取って保護しようとしたが成功しなかった。

その間の様子は、次の寺田宛の三通の書簡に綴られている。ひとつは、金玉均の供養のために法名をつけ、三十五日忌に読経を依頼するのもの（一八九四年〈明治二七年〉四月一三日）、[36]

扨こゝに一事相願度は、金玉均氏事、あの通りの始末、不幸とも不運とも言語に尽し難く、死すれば即無縁にて、一偏（遍）の回向いたす者も有之間敷に付ては、印の為め位牌を作り、仮に拙宅の仏壇中に安

置し、朝夕お花にても供へ、又その中に読経の供養をも致し度、家内と相談仕候処、差向き位牌を注文するにも何か法名なくしては不叶次第に付、御病中恐入候得共何なりとも一紙片に御記し御郵送相願度存候。行々此位牌は弊宅の仏壇に置くか或はお寺に頼むかは其辺は後日の談として、兎に角に供養の目的を早く作り度相願候義に御座候。右願用まで申上度、余は拝顔の上万々可申述候。匆々頓首。

「あの通りの始末」は金が上海で虐殺され、朝鮮で「凌遅斬の刑」に処されたことを指し、「印の為」とは遺体そのものが日本になかったため、仮の位牌を作るということを意味している。その位牌を仏壇へ置き、朝夕供花と読経の供養をしたいので、そのために金に「法名」をできれば早く付けて欲しいと頼んだのである。

六日後の手紙では、真浄寺（寺田福寿）に、金玉均の法名の送付を感謝し、四十七日の法要の読経を依頼している（一八九四年〈明治二七年〉四月一九日）[37]。

拝啓仕候。過日も金氏之法名早速御認被下、難有奉存候。直ニ仏具やに申付、位牌も出来候ニ付も、来ル二十四日ハ四七日相当ニ付、弊宅之仏壇ニ而御読経相願度。時刻ハ午後五時よりと定め、三宅氏と甲斐軍治（司）、和田延太郎（次）之両人参拝之筈ニ御座候。又当日の仏事ハ何れ夜ニ入可申、御病中夜風を犯して御帰りハ掛念不少ニ付、可相成ハ拙宅へ御一泊相成候やう致度、併せて申上置候。右要事のみ申上度、匆々如此御座候。頓首。

さらに五日後の四月二四日、益田英次に宛てた手紙で、「法事ハ福沢宅ニ而執行、交詢社とハ間違なり。坊

様ハ寺田之悴と塾之松見氏へ案内致し候。朝鮮之生徒在塾之者三名と、山崎英夫氏へ案内致し候。増田君も御来会相願候事なり。時刻ハ今日午後五時ゟお経を読んて、其跡ニ而食事之積り」と、金玉均法事の段取を伝えている。(38)

金玉均の遺髪などはひそかに日本に持ち帰られ、宮崎滔天たちによって葬儀が浅草東本願寺別院で営まれた。この年、一八九四年の七月二三日、日本が朝鮮の内政改革を主張して王宮を占領して大院君を擁立し、朝鮮社会近代化のための改革を断行した甲午改革（一八九四―九五年）が始まっている。

四　保険思想の実践者としての寺田福寿

それでは、以上のような金玉均と福沢の交流の中でしばしば登場し、福沢が信頼し仏事の頼み事や仏教についての尋ね事をしていた寺田福寿なる人物（本名は石亀福寿、時に真浄寺という寺院名で呼ばれている）はいかなる経歴の持ち主であったのであろうか。(39) その経歴には、不明なところ、記されていても不整合な点が多いが、彼の著書『阿弥陀経通俗講義』（哲学書院、明治二七年六月）の冒頭に付された「寺田福寿師小伝」を中心に、まずその最大公約数的なところを要約しておこう。

石亀福寿は、一八五三年、越前国足羽郡の真宗大谷派（東本願寺派）道恩寺に生まれ、幼くして両親を失ったが、その才能を認められ、京都の渥美契縁のもとで仏教を学んだ。大阪と徳島（確認できる史料は無いが、前述「小伝」には「転じて阿波徳島の慶應義塾に遊び」とある）の慶應義塾で学んだ縁もあり上京後、福沢の家に寄宿することがあった。福沢は学生対象の仏教に関する演説を寺田させることがあった。一八八一年六月

二四日の明治会堂での彼の演説は、仏教界に彼の名を知らしめたようだ。福沢の「明治十年以降の知友名簿」（『全集』19）の一〇年末頃の欄に、東洋史学者の「那珂通世の知人」「本願寺内東派浅草」とある。[40] 那珂通世は大阪慶應義塾で教鞭をとっていた。

一八八二年、二九歳のとき、福沢の勧めにより本郷駒込の名刹真宗大谷派真浄寺の婿養子となり、寺田の姓を継いだ。[41] その後、駒込吉祥寺に仏教会を設立、学生への仏教の普及に努め、仏教雑誌『のりのはなし』（法話）を発刊した。他にも、貴婦人法話会の設立、寺院課税の反対運動、哲学館創設への参加、無縁仏のための「無常堂」の設置など幅広い教化活動を展開している。

寺田は、当時の日本の仏教の各宗派寺院が基本財産もなく、凋落状態にあった状況を嘆き、元寺院の土地や山林の還付運動にも携わっている。神仏分離と「廃仏毀釈」によって幕を開けた維新後の仏教排斥政策は、明治一〇年の教部省廃止によって一応の収束を見るが、その間に仏教寺院の受けた経済的打撃は大きかった。その苦境を乗り切るために明治一〇年代から、仏教各宗派は、企業経営に関心を示し、そのひとつとして保険結社に着手し始める。[42] 三縁社（芝増上寺）、興隆社（深川霊巌寺）などはその代表的な例である。明治二〇年代に入ると、仏教会は多角的な事業に乗り出し、明治二六年から始まる生命保険事業への進出は最も注目されたもののひとつであった。[43] その中で、明教保険株式会社（明治二七年五月一五日開業、所在地は京都）を起こしたのが寺田福寿である。僧侶が営利企業に従事することは、仏教教理では長い間禁止されるべきことと理解されていたが、こうした動きは寺院の維持、僧侶の生活の保証がいかにこの時期大きな問題であったかを示すものであった。

この寺田福寿は、明治二〇年ごろ、すでに寺院僧侶の経済的苦渋を少しでも解決するために仏教保険を最初

に提案したとされている。[44] 東京府下の二〇〇あまりの寺が株主となって生命保険会社を作れば、何人の死に当たっても、多少の経済的な困窮を救うことができるのではないかというのが、その目論見であった。この「保険」の考えが、福沢の影響をどれほど受けたものであったのかは興味深い点である。ひとつ注目すべき論点は、キリスト教世界で、生命保険が企業経営として「道徳的か否か」という議論が起こっているのに対して、日本の仏教界では生命保険と道徳性に関する議論は特に起こっていないと見られることだ。周知のように福沢は、その著『西洋旅案内』（慶応三年）の附録において「災難請合」としてインシュアランスを紹介し、生涯請合、すなわち生命保険の仕組みを解説している。この点に関連して、福沢の生命保険論がいかなる形で寺田に影響を与えたのかは今後論究されるべき課題であろう。

最後に、福沢と寺田の交際を日常のレベルで少し具体的に見ておこう。『書簡』で見る限り、二つの側面があり、いずれもその交友の深さを思わせる。ひとつは家族の仏事に関して、福沢は寺田を大いに頼りにしているということ。いまひとつは、寺田の仏教理解を福沢は信頼し、仏教教義について教えを請い、外国人へ仏教を紹介するとき寺田の助けを求めていることである。（ちなみに寺田福寿自身は、仏教の理論的な教導者としての役割も果たしており、少なくとも七冊の著書を残している。[45]）

前者については、例えば一八八一年（明治一四）三月二日、慶應義塾出版社の事務責任者であった中島精一に宛てた書簡で、知人の島村鼎甫の初七日の費用を石亀（寺田）に渡すよう依頼している。また一八八三年末ごろから、福沢は、石亀にしばしば家族の慶弔事について相談する手紙を送っている。長女婚儀のため忙しかったため火災の見舞いが送れたことを詫び（一八八三年一二月一三日）、あるいは、貴婦人法話会へ妻と娘が出席することを知らせ、塾生の遊猟の世話を依頼する手紙（いずれも手紙の年月日は不詳）、母お順の十三回忌

法要の読経を頼み、婦人たちのパーティーの開催について伝え（一八八六年五月二日）、寺田の病気を見舞う手紙（一八八八年九月一六日）、母の十七回忌の供養を延期したことを告げ、当日の案内を認めた手紙（一八九〇年六月一五日）など、その交友の深さを思わせるものが多い。

後者については、例えば、本願寺第八世蓮如が真宗の教義を平易な書簡文で示した「御文章」の中の字義を尋ね（一八八四年九月二五日）、米国の知人が火葬について問うたので、それに答えるため教えを請い（一八八五年七月一一日）、石亀の教示に対する礼状（一八八五年七月二〇日）、イギリス貨物船ノルマントン号が紀州沖で沈没した事故に関して、その追弔法会を早く開くことを勧める手紙（一八八六年一一月一四日、一五日）、涅槃図と地獄図の購入方法を尋ねる手紙（一八八七年六月二日）、仏教に興味を持つイギリスの詩人・ジャーナリスト、E・アーノルド（Edwin Arnold）を自宅に招くので、石亀に同席を求める手紙（一八九〇年二月一〇日）など、気が置けない通信文が目立つ。

福沢と寺田の交友について、三浦節夫は、哲学館の卒業生で、真浄寺で寺田の活動を手伝っていた境野黄洋のつぎのような言葉を引用している。(46)

> 福沢先生からは非常な信頼を受けて居た人で、先生の家の仏壇はきまった命日、寺田師が行って御経を読むことに定まっていた。黙って上り込んで行って、黙つて還るという風であった。同義塾出の坊さんも、釈宗演とか、土宜法竜とかいふ人々も居たが、先生は一番寺田師を信頼して居たようである。

ちなみに、一八九三年三月一八日付けの手紙は、福沢が自分の発言として出版される書物に関する不満を寺

田へ率直に伝え、その出版差し止めの措置を依頼したものである。内容は、福沢邸で開かれていた真宗の法談会をまとめた『朝家の御為』という本が、「老生之思ひ又発言したる処とハ大いに齟齬せり」という理由からである。同書の出版広告を同日の『時事新報』誌で知り、ただちに寺田に善処を求めている。このように、身辺の小さな、しかし慎重を要する問題の解決をただちに寺田に頼む姿は、福沢の寺田への厚い信頼の現われと見ることができる。

また、一八八四年二月、金玉均の腹心、卓挺埴（僧・無不）が神戸で病に倒れ神戸病院で死去した際、金玉均は喪主として浅草本願寺で葬儀を執り行い、寺田福寿の真浄寺に埋葬している。寺田福寿らが読経し、会葬人として福沢の名が挙がっている。[47] これは金が第三次来日を終え、帰国の途に着く一ヶ月余り前のことである。

一八九四年三月に金玉均が暗殺されてからは、供養の法名を石亀に依頼し三十五日忌や四十七日忌の読経を願う手紙を贈っていたことはすでに述べたとおりである。金玉均の墓所が寺田福寿の真浄寺となったことは、福沢、寺田、金、三者の以上のような密な繋がりを想うと、極めて自然な成行であったといえよう。

五　結びにかえて

この小論で述べた寺田（石亀）福寿、金玉均、福沢の関係について、筆者が興味深く思う点をいくつか加えることによって結びにかえたい。

ひとつは福沢が朝鮮問題に関して、開化派のなかの穏健派グループではなく、急進グループの金玉均たちとつながりを持ったという点である。確かに、そこには韓国の仏僧・李東仁から石亀福寿、そして石亀の大阪慶

應義塾を縁とした李東仁と金玉均とのパイプが認められる。したがって、福沢の「開化派」の中の（穏健派ではなく）急進派との繋がりは、こうした人間関係の中で偶々でき上がったと言えるかもしれない。しかし単なる「偶然」だけでは、これまで見てきたような福沢の急進派へのコミットメントが持続するとは思えない。

金玉均を朝鮮近代史の中でどう位置づけ評価するのかについてはいくつかの立場があるようだ。その点を論じるには筆者の力は不足している。金玉均が本当に「親日派」であったのかどうかについても意見は分かれよう。そもそもそうした問題の立て方自体に意味があるのかという疑問も残る。重要な点は、姜在彦『朝鮮の開化思想』が強調するように、そこに福沢の「開化派」への「指導」があったと見るべきではなく、朝鮮における開化思想および開化派の形成には内発的な力が十分働いたということであろう。(48)

しかし、石亀福寿が金玉均を福沢に紹介し、その福沢が金玉均の人格に感服し、彼を信頼し、援助し、朝鮮問題に（作家ではなく役者として）深くかかわるようになったという事実は残る。そうした福沢の行動の根拠は何処にあったのかを考えると、そこに「行動者」としての福沢像が浮かび上がる。

いわゆる「脱亜論」は、一八八四年一二月の甲申事変の翌年の一八八五年三月一六日の『時事新報』に掲載された。このタイミングからして、明らかに福沢の朝鮮独立に関する期待が裏切られたという大きな失望感を読み取ることができる。その大いなる失望感こそ、「脱亜論」の最後の文章「左れば今日の謀を為すに、我国は隣国の開明を待ちて共に亜細亜を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も、隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず」が鮮やかに示していることは言うまでもない。(49)

本稿では、石亀福寿が大阪慶應義塾に入社したことが、福沢と金玉均の交際を可能にしたと推論した。しか

しこの推論は、大阪慶應義塾の役割を強調しすぎたかもしれない。金の使者・李東仁が石亀に会ったことは、その後の金の活動に大きなモメンタムを与えたかも知れない。しかしたとえ石亀の仲介がなくても、金はいずれ福沢と東京のどこかで出会い、肝胆相照らす間柄になったとも考えられる。福沢と石亀の交際が大阪慶應義塾の縁がなくても成立していたかもしれないと考えると、次のような関係把握が推論として妥当だと感じる。

福沢も石亀も保険事業に共感していることから読み取れるように、近代的な合理的経済思想という点で、お互い理念を共有する間柄であり、それゆえにこそ、石亀が慶應義塾に在籍したか否かは二次的な問題であったと言える。その理念が慶應義塾のそれと一致しており、石亀の仲介で福沢と金玉均の関係が生まれたという事実が重要なのであり、石亀の思想と行動が（大阪）慶應義塾の「建学の精神」ゆえのものなのか否かは、本来論証のできない問いに帰着するのである。

〔謝辞〕本稿の作成に当たって、大阪慶應義塾関連の資料の閲覧の際には、慶應義塾大学法学部の小川原正道氏、慶應義塾福沢センターの都倉武之氏、赤堀美和子さんはじめセンターのスタッフの方にお世話になった。金玉均と朝鮮近代史関係の文献については、国際日本文化研究センターの松田利彦氏にご教示いただいた。文献の検索と複写は、国際日本文化研究センター機関研究員の松村博之氏の手を煩わせた。ここに記して感謝したい。

末筆ながら、筆者に『福沢諭吉書簡集』（全九巻）を与え、その読破を強く勧めてくださった故・西川俊作慶應大学名誉教授の思い出に、このまことに拙い小論を捧げることをお許しいただきたい。

注

（1）梅溪昇『緒方洪庵と適塾』（大阪大学出版会、一九九六年）。

（2）分校設置の経緯については、『慶應義塾百年史』上巻、第二章第三節、および第三章第三節の「分校の設置」を参照した。
（3）その所在地は正確なところは不明だとされる。「大阪慶應義塾所在地解説」『福沢手帖』二八、を参照。
（4）分校関係の写本『大阪慶應義塾』の冒頭部分。
（5）明治四年三月慶應義塾教員、五、六年塾長（『百年史』付録）のち三菱系の実業人として名を成した。
（6）『慶應義塾百年史』上巻、第三章第三節、五一九頁。
（7）『福沢諭吉書簡集』第一巻、三八五―三八六頁。
（8）小栗又一『竜渓矢野文雄君伝』（春陽堂、昭和五年）。但し、同書は「明治七年には分校を大阪に建てた」（一一二頁）など、細かな点で正確さを欠く。
（9）『慶應義塾百年史』上巻、第三章第三節、五三六―五四三。『竜渓矢野文雄君伝』一一三頁。
（10）「慶應義塾分校設立願」「慶應義塾入社帳」（第五巻）を参照。
（11）『入社帳』（第五巻）vii頁では、転科・転学生を含めて九四名を計上している。
（12）富田正文『考証 福沢諭吉 下』（岩波書店、一九九二年）五九〇―五九一頁。
（13）『福沢諭吉書簡集』第三巻、九頁。
（14）会田倉吉「石亀福寿の慶應義塾入学のこと」『福沢手帳』一一、一九七八年、一一―一二頁。
（15）徳島慶應義塾の『入社帳』は、明治九年四月からの記録のみであるから石亀の名前がない、と考えるのが妥当かもしれない。
（16）以下本節の金玉均の履歴の解説は、主に古筠記念会編纂『金玉均伝（上巻）』（慶應出版社　昭和一九年）と琴乗洞『金玉均と日本―その滞日の軌跡』（緑陰書房、一九九一年）をまとめたものである。また、福沢の朝鮮問題についての考えを辿る上で、杵淵信雄『福沢諭吉と朝鮮・時事新報社説を中心に』（彩流社、一九九七年）、上野慎一郎『橋は

架からず―明治日本と李朝の志士たち』（文芸社、二〇〇八年）が大変参考になった。

(17) 「朝鮮の交際を論ず」『時事新報』明治一五年三月一一日。

(18) 李東仁、及び「開化派」の人物関係については、姜在彦『朝鮮の開花思想』（岩波書店、一九八〇年）を参考にした。

(19) 『金玉均伝（上巻）』（慶應出版社、昭和一九年）には、「福沢先生方に寓居せる寺田福寿」は「年少三田で学び」とある（一三四頁）。このあたりの事実確認の手続きはなかったと思われる。

(20) この初来日が一八八一年一二月なのか、それより以前か、一八八二年春なのかは確定していない。琴乗洞は一八八二年三月説を採っている。

(21) 『時事新報』（明治一五年九月一一日）の「金玉均氏」で、福沢の金玉均観が読み取れる。

(22) 富田正文『考証 福沢諭吉 下』五九二頁。

(23) 「牛場卓蔵君朝鮮に行く」『時事新報』（明治一六年一月一二日）。

(24) 一八八二年慶應義塾を卒業した井上角五郎は、翌八三年福沢の指示で、朝鮮政府の外衙門顧問、博文局主任となっている。彼は、福沢の熱心な勧めにより、公式文書としての朝鮮語と漢字の混用文の創出に協力している。また、京釜鉄道、南満州鉄道の敷設にも関与した政治家、実業家でもあった。

(25) 『福沢諭吉書簡集』第三巻、三〇七―三〇九頁。

(26) 『時事新報』（明治一六年六月二日）「日本の資本を朝鮮に移用するも危険あることなし」。

(27) 以下の経緯の説明は、富田正文『考証 福沢諭吉 下』（岩波書店、一九九二年）五九四頁による。

(28) 甲申事変については『時事新報』（明治一七年一二月一五日）「朝鮮事変」で、「独立党が先づ手を出した」と推測し、しかし一八日の『時事新報』では清軍の出動を厳しく批判している。

(29) 「仏清新天津条約」（『時事新報』社説、明治一八年六月一六日）。

(30) 例えば「朝鮮独立党の処刑」(明治一八年二月二三、二六日)では、独立党の類縁者に対する残酷な処刑を批判している。責任論を棚上げした日清の交渉に関しても、その不満は「人心の焦点」(明治一八年三月五日)、「国交際の主義は修身論に異なり」(明治一八年三月九日)などに見られる。

(31) 「福沢諭吉関係新資料紹介　福沢諭吉書簡」(『近代日本研究』第23巻、平成一九年三月)。この資料は小川原正道氏のご教示による。

(32) 琴乗洞『金玉均と日本―その滞日の軌跡』(緑陰書房、一九九一年)一九四頁。

(33) 「脱亜論」『時事新報』(明治一八年三月一六日)。

(34) 『福沢諭吉書簡集』第六巻、一七八―一七九頁。

(35) 法名は「古筠院釈温香」。法要は、東京朝鮮公使付通官山崎英夫、朴泳孝などを福沢邸に招いて営んだ。

(36) 『福沢諭吉書簡集』第七巻、三〇九―三一〇頁。

(37) 『福沢諭吉書簡集』第七巻、三一五頁。

(38) 『福沢諭吉書簡集』第七巻、三一六頁。

(39) 以下、上坂倉次「明治仏教企業の発生―特に初期の銀行業」『明治仏教』第二巻 第四号(昭和十年)四―六頁。同「仏教生命保険の提唱者」『明治仏教』第三巻 第一〇号(昭和一一年、二―三頁)と、三浦節夫「福沢諭吉・井上円了・寺田福寿・小栗栖香頂」(『福沢諭吉年鑑23』平成八年、三一―五四頁)を参考にした。寺田福寿自身の正確な経歴は、不明な点が多い。一般に書かれているものも、一致しない事実や出典不明なものが多い。

(40) 『福沢諭吉書簡集』第四巻、三四三頁。

(41) 以下の情報は、前出の「寺田福寿師小伝」と小林惟司「明治期の仏教生命保険事業―特に明教保険株式会社をめぐって―」(生命保険文化研究所『所報』四九号、一九七九年一二月)に拠る。

(42) 仏教と生命保険の関係について触れた文献は意外に多い。上坂倉次の論考が小林論文の参考文献に多く挙げられて

いる。中でも友松円諦「明治時代の仏教保険事業」『現代仏教』一〇五号（昭和八年）が内容的に充実している。

(43) 小林前掲論文によると、仏教生命保険株式会社（明治二七年、所在地：京都）をはじめ、東京と京都を中心に一〇社ほどの例が上がっている。

(44) 上坂倉次は前掲「仏教生命保険の提唱者」の中で、「寺田福寿その人であるとする」と断定している。

(45) 先に挙げた『阿弥陀経通俗講義』（哲学書院、明二七年六月）の他に、『川越町回復の説教』（山崎与平、明二六年六月）、『貴婦人会法話』（渥美契縁他、寺田福寿、明二一年一月）、『教育勅語説教』（沢田文栄堂、明二八年六月）、『人生の目的』（寺田福寿述、哲学書院、明二六年四月）、『人道教初歩』（寺田福寿著他、哲学書院、明二〇年九月）、『善悪標準』（哲学書院、明二六年七月）。

(46) 三浦節夫「福沢諭吉・井上円了・寺田福寿・小栗栖香頂」（『福沢諭吉年鑑23』平成八年、四三頁）。（出典は境野黄洋「追憶雑談」『現代仏教』第一〇五号、昭和八年七月一日、五二五頁。

(47) 琴乗洞『金玉均と日本―その滞日の軌跡』（緑陰書房、一九九一年）一三四―一三五頁。

(48) 姜在彦『朝鮮の開花思想』（岩波書店、一九八〇年）二〇一―二〇二頁。

(49) 「脱亜論」『時事新報』（明治一八年三月一六日）。